

# 教育研究業績書

2017年10月20日

所属：日本語日本文学科

資格：教授

氏名：塩出 雅

研究分野	研究内容のキーワード
中国思想史, 中国文化史, 日本漢文史	
学位	最終学歴
文学修士	大阪大学大学院 文学研究科 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 中国古典読法通論	共	1992年08月	朋友書店 (朋友学術叢書)	豊福健二、塩出雅、柴田清継 王力責任編集、馬漢麟、郭錫良、祝敏徹著『古代漢語』のうち、「古漢語通論」部分の翻訳。内容は文法事項から韻律の問題、さらには古代の天文、制度を含む多岐に亘るもので、中国古典を研究する上での基本工具書とも言うべきもの。三者共同作業での翻訳のため、特に担当部分というものはない。総ページ数約500頁
2. 皆川淇園・大田錦城	共	1986年10月	明德出版社	江戸時代、開物理学の祖、皆川淇園と、考証学の代表である大田錦城の生涯及びその学問について述べたもの。担当は、大田錦城の学問についてであり、彼の著作『九経談』より「大学」を中心に宋学との関係を取りあげ、ついで清朝考証学及び徂徠学との対比を行ない、従来の説とは違い、彼は寧ろ清朝考証学や徂徠学よりは宋学に心を寄せ、影響を受けたものであることを論証した。(pp218-250)
<b>2 学位論文</b>				
<b>3 学術論文</b>				
1. 宮内庁書陵部所蔵古活字版『蒙求抄』翻刻並びに注 (1)	共	2014年3月5日	『日本語日本文学論叢』第9号 (武庫川女子大学大学院文学研究科)	標記『蒙求抄』を国会図書館所蔵『蒙求聴塵』、京都大学清家文庫所蔵『標題補注蒙求』の書き込み等と対比しつつ、翻刻及び注を施したもの。読みやすさを考え漢文引用部分は書き下し文を補っている。 。大学院での演習をもととしたため、共著としたが、最終責任は筆者にある。
2. 茨木市常稱寺蔵『總持寺縁起絵巻』詞書訳注	単	2012年3月5日	『日本語日本文学論叢』第7号 (武庫川女子大学大学院文学研究科)	常稱寺所蔵の漢文で書かれた『總持寺縁起絵巻』の詞書を、翻刻し、書き下し文、現代語訳及び注を施したもの。日沖氏に翻刻をした先行の報告があるものの、翻字や句読に誤りが多く、どのように読んでいるのかも不明な点が多かった。そのため、注を施しつつ、その根拠を示して、訳したものである。
3. 郭巨の釜 二十四孝	単	2010年7月10日	武庫川女子大学国文学会『会員の広場』第57	二十四孝を中心に、孝行譚がどのようにまとめられていたのか、その成立の過程とその後の展開を述べ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
4. 浦嶋はどこへ行ったのか？ (二)	単	2010年3月19日	武庫川女子大学国文学会『会員の広場』第56号	、さらに日本に伝来されてどのように変化したのかに触れ、最後に郭巨の釜の釜とは何かについて考察する。 「浦嶋はどこへ行ったのか？」の続き。風土記の記事を中心に諸資料と比較したもの。
5. 浦嶋はどこへ行ったのか？	単	2009年3月19日	武庫川女子大学国文学会『会員の広場』第54号	誰もが知っている浦嶋説話について、巖谷小波の『日本昔噺』のものを導入として、洪川本『御伽草子』に遡り、その違いを説明した後、『日本書紀』『丹後国風土記』などとの比較を行う。
6. 「隨筆」の勧め	単	2008年7月25日	武庫川女子大学国文学会『会員の広場』(第53号)	漢語における「隨筆」の意味を説明し、江戸期における隨筆の例として荻生徂徠、伊藤東涯、西島蘭溪などのものを挙げ、江戸期の隨筆を読むための導入としたもの。
7. 『増賀上人行業記』による増賀像(上)	単	2007年03月	文芸論叢第68号	『増賀上人行業記』の編纂意図と増賀をどのような人物として描こうとしているかを論じようとしたもの。本編では説話を区分し、元となった説話との対比に於いて考えた。(未完)
8. 『詩本義』に見る序および毛・鄭批判	単	2006年04月	『中国学の十字路』	欧陽脩の『詩本義』に見られる、序および毛伝鄭箋に対する批判の内容を検討することにより、欧陽脩の詩解釈に対するスタンスを見たもの。彼の解釈のスタンスは従来の経学的な発想から離れ、詩に表現された詩人の意を探る点に中心があったことを明らかにした。
9. 「多武峯縁起絵巻」詞書現代語訳稿(上)	単	2005年3月20日	武庫川国文第65号	談山神社の縁起と言える『多武峰縁起絵巻』の漢文詞書を現代語訳したもの。『「多武峰縁起」訳注』では書き下し文だけしか添えていたが、新たに現代語訳とその後の知見を付け加えたもの。
10. 『多武峯縁起絵巻』詞書現代語訳稿(下)	単	2005年11月	武庫川国文第66号	前稿を受けて現代語訳を完成させた。
11. 南北朝士大夫の一典型 — 『顔氏家訓』—	単	2000年5月26日	『中国思想の流れ (中) 隋唐・宋元』晃洋書房	『顔氏家訓』の著者として知られる顔之推について、その思想を述べたもの、南北朝期、南北朝に使えた士大夫が如何なる意識を持ってその時代相を眺め、来たるべき時代にどのような期待をいだいたかを『顔氏家訓』を中心に探り、同時に彼自身における限界を指摘した。(pp. 8~12)
12. 北宋儒学の魁 — 欧陽脩—	単	2000年5月20日	『中国思想の流れ (中) 隋唐・宋元』晃洋書房	唐宋八大家として、その文学面が特に注目されている欧陽脩について、その歴史家、経営者としての面にスポットをあて、とくに「正当論」を中心として彼の現実主義的傾向を指摘し、その経営面における影響に言及した。(pp. 137~143)
13. 唐代後期の詩経学—施士●と成伯興『毛詩指説』をめぐる—	単	1999年11月	武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集	唐代後期を代表する詩経学者である施士●・成伯興について、その経学史上における役割を明確にすることを目的に論述した。彼らの特徴は、全科無条のごとく守られていた毛鄭の解釈に対して疑義を発するものであり、時代の趨勢と関わる合理性を持って過去の経学に新たな光をあてたものであり、やがて宋学として花開ききっかけとなっている。全 (pp. 11)
14. 王翰の「涼州詞」について	単	1998年6月	歌姫(武庫川女子大学万葉風土研究会)第14号	涼州詞の一つの読み方として、当時の社会的状況を踏まえ、王翰がどのような様子を読もうとしたのかを示した。
15. 『白氏六帖』について—その書誌学的事柄—	単	1996年03月	類書の総合的研究(科研報告書)	類書のひとつである『白氏六帖』について、その書誌学的事柄を論じたもの。『白氏六帖』は未定稿であり、白居易の死後発見されたものと推測され、比較的初期の頃から注が施されていたものである。静嘉堂蔵『白氏六帖』は晁仲街補注本系統のものと考えられる。全 (pp. 10) (pp. 49~58)
16. 「多武峯縁起」訳注	単	1995年12月	武庫川国文 46号	奈良県桜井市にある談山神社所蔵の、後桂蓮院宮筆とされる漢文縁起写本を訓読し、絵巻の詞書きなどと対校し、更に日本書紀や藤氏家伝などと比較した上で、注を施したもの。全 (pp. 28)
17. 孔さまのめしものは—『論語』に見る食—	単	1995年01月	武庫川女子大学国文学会『会員の広場』26号	『論語』郷党篇の一章を手がかりに、古代中国の食生活及びそれと関わりのある文学作品について言及し、中国古代における食習慣、食文化について論じたもの。(pp. 6-8)
18. 定められた王朝の運命—陰陽五行思想—	単	1994年08月	新人物往来社『幻術三国志』	陰陽五行思想、それぞれの説明を行い、さらに五行説より派生した五徳終始説に筆を及ぼす。五徳説にもとづく王朝循環の理論を明らかにし、それが後世に与えた影響を論じた。(pp. 270-279)
19. 「勸学院の雀—日本漢文学史の一斑—	単	1994年03月	武庫川国文第43号	「勸学院の雀は蒙求を転る」及び「門前の小僧、習はぬ経を読む」という諺を手がかりとし、日本文学と中国文学の発想の違い、『蒙求』の日本での受容の仕方等に論及し、更に勸学院は大学寮のそれではなく、勸学講院であろうと論じた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
20. 『古今和歌集序』論注 —真名序を中心として—	単	1992年11月	武庫川国文40号	(p. p. 1-42) 真名序を、仮名序と対比しつつ、漢文文献として如何に理解すべきであるか、その内容に即しつつ、詳細に論じた。筆者の中国学研究の立場から、従来の国文学者の研究をふまえつつ、それらに対する批判、問題点の指摘を多く行っている。
21. 「真人不夢」について —道家の夢—	単	1990年12月	武庫川国文36号	中国古代の夢に関する説話のなかで、特に道家の夢に絞り、その意識を探ったもの、先ず古代中国人の夢の共通概念を明確にした上で、夢そのものを主要なモチーフとする道家の説話を取り上げ、その特異性に論究し、特に道家においては夢と現実との関係を利用して自説を展開させていった点を指摘した。(pp. 93-104)
22. 「左傳の占星記事について」補論	単	1986年6月	中国研究集刊(大阪大学中国学会) 玄号(第3号)	「左傳の占星記事について」の補遺として、分野説の成立について述べたもの。上記論文では印刷にふさなかつた表を含む。諸書に見える分野説及び二十八宿の異同を中心として、『春秋左氏伝』の占星記事が十二分野説成立以前の姿を示すものであることを論じた。
23. 左傳の占星記事について	単	1985年10月	東方宗教(日本道教学会) 第66号	『春秋左氏伝』に散見する占星術に関する説話について検討を加えたもの。まず、占星術が行なわれる時にいかなる理論が用いられているかを中心に検討を加え、その理論として陰陽説・五行説・分野説などを抽出し、基本的には戦国末期から漢初にかけて占星家との伝承である原型が出来、それを更に説話的に膨らませ、儒家的潤色を帯びたものが現在『春秋左氏伝』に見えるものであることを論じた。
24. 陸賈新語について		1980年9月	池田末利博士 古稀記念東洋学論集	漢代初期の人物である賈誼の思想について、その時代的特性と共に論じたもの。漢代初期は黄老思想が政治の場を席卷したとされるが、その代表的人物である曹参・陳平の言動を見ると呂太后に対する保身のために汲々としていたのが実状であり、その間の政治は秦以来の法令に拠って行なわれていたことを述べ、儒家・黄老・法家思想が賈誼の著『新語』にいかなる影響を及ぼしているかを論じた。(pp. 437-452)
25. 子産の施策と宗教意識	単	1978年12月	待兼山論叢(大阪大学文学部) 第12号	春秋時代、鄭の国の宰相として有名な子産の政治及びその基本的思想について論じたもの。彼はその施策故に革新的且つ合理主義的特質が挙げられるが、その彼の施策の根本は伝統的貴族政治社会を守ろうとするもので、刑書を公布したとの面からだけで革新的とするのは早計であることを、彼の施策全般から述べ、更にその宗教意識からも伝統的な世界に生きるものであることを論じた。
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
<b>2. 学会発表</b>				
1. 春秋左氏伝の夢の記事をめぐって	単	1989年12月		『春秋左氏伝』に含まれる夢関係の説話について、それらがどのような意図のもとに創作され、歴史事実と結びつけられたのか、またそれらがどのようにして『春秋左氏伝』の中に取り入れられたのかを歴史説話文学集としての『春秋左氏伝』の成立問題と関連させつつ論じたもの。
2. 中国古代の夢について	単	1989年11月		『春秋左氏伝』『戦国策』などをはじめとする、歴史書と秦代までの思想家の著書にみられる夢に関する記事を材料として中国古代人の夢に関する概念、及び各思想家における特異性を問題としたもの。その一部は既に論文として発表した。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術(建築模型等含む)・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 関西文化研究センターと奈良女子大学との共催シンポジウム「多武峰談山神社の絵巻—大職冠と増賀上人—」にパネラーとして出席、二つの絵巻の詞書に対する見解を発言した。		2004年		
<b>6. 研究費の取得状況</b>				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	東方学会 日本道教学会 日本中国学会